

# 面会時間自由化によって明らかになった 両親の潜在的ニーズ

Open visitation to parents revealed their veiled needs.

小倉 弘子 宮本 のり子

Hiroko Ogura Noriko Miyamoto

## 要旨

**目的：**制限していた面会を自由にした時の両親の面会に関する動向を調査し、面会に対するニーズを明らかにする。

**方法：**面会者に対し面会毎に入退室時刻等の記載を依頼した。記載データの精度を向上させるために看護婦が各勤務帯毎に記載事項のチェック等を行い、このデータを集計分析した。

**結果：**面会が最も多かったのは昼は12～14時、夜は20～22時であり、これは従来の面会時間とは異なる時間帯であった。一回の面会の在室時間は平均85±69分で、面会者の4分の1は従来の面会時間の最長である2時間を越えていた。これらから、従来の面会時間は両親の潜在的ニーズを満たしていなかった。また、我が子を抱くことができるようになるとうできない場合に比べ面会時間は2倍以上に延びていた。

**結論：**面会時間自由化による面会動向を調査した。自由化することによって今まで気付かなかった（隠されていた）ニーズを知ることができたのは重要なことであった。そして、このことによりファミリーケアに対する私達の態度を向上させることができた。

**キーワード：**面会時間自由化、ファミリーケア、NICU

**Objective :** By surveying the parents' visiting behaviour on changing restricted visitation to open in our institute, we aimed to estimate the parents' needs for visitation correctly.

**Method :** We asked all the parents to write their time of coming in and out of our NICU after changing to open visitation from restricted. For more detailed data, we (NICU nurses) checked the figures parents had written and filled in the patient's latest conditions in every shift. These data were analyzed statistically (Mann-Whitney test).

**Main Results :** High frequent visiting period in the daytime was 12:00 to 14:00 and at night was 20:00 to 22:00, these were different from the former periods we had set (14:00 to 16:00, 18:00 to 19:00). The mean length of a visiting was 85.0 ± 69.0(SD) min. Almost a quarter of visitors stayed two hours or more. So, the former restricted situation seemed unsatisfactory to parents.

In the cases of patients who were allowed to be out of a incubator, the length of their parents' visitings was extended two or more times than the length of those where patients were not allowed out.

**Conclusions** : We have investigated when the high frequent visiting period was and how long the parents stayed after visitation opened. It is important to know the veiled needs about parents' visiting. Then, these needs pushed us for improving our attitudes to family-centered care.

**Key words** : open visitation, family-centered care, NICU

## I. はじめに

新生児集中治療室 (NICU) に入院した児の最終的な目標は病気を治癒あるいは安定化させ家族の中で生活ができるようにする事である。そのため NICU 看護のあらゆる場面で家族を中心とした看護の展開を考えて行くことを忘れてはならない<sup>1)</sup>。

入院中から児が家族 (特に両親) としっかりとした絆で結ばれるためには、両親の児への面会ができる限り多いことが望まれる。ところが、感染への危惧、業務遂行上の障害などから面会を制限している施設がまだまだ多いのも私達の施設を含め日本の現状である<sup>2)</sup>。

しかし、一番の障壁であった感染に対する危惧は適切な管理が行われていれば問題はないとすでに多くの報告に見られている<sup>3-5)</sup>。そこで制限していた面会時間を24時間自由にし、面会状況が安定したと思われる半年後に面会者の動向を調査した。

## II. 目的

本研究の目的は、両親及び家族の面会に対するニーズをより明確化できることにより、業務遂行のバランスとの間で効果的な面会時間の設定と、スタッフのファミリーケアへの意識向上を図ることである。

## III. 研究方法

7～8時、14～16時、18～19時の一日合計4時間であった面会時間を、1997年5月より原則として両親に限り自由に面会できることとした。約半年後の同年12月に1ヶ月間、入院している患児の面会者に対し、各面会毎に必要な事項 (面会者の児との続柄、入室時刻、退室時刻、児を直接抱いたか否か) を専用のノートに記載する依頼をした。記載漏れを防ぐためと、当日の児の病状が直接両親が抱くことができる状態であったかどうかを看護婦が面会毎にチェックを行った。

家族への依頼事項等本研究に関しての倫理的側面は、病棟婦長主任会で検討し、新生児・未熟児センター長の承認を得た。また、プライバシー保護のため、長時間の面会者が付近の患児をのぞき込むことのないように、担当看護婦が今まで以上に配慮することとした。

記載されたデータを computer soft-Excel4.0 に転記し、集計・分析を行った (統計学的分析は StatView を使用)。

## IV. 結果

1997年12月の面会の通算総数は1,072回であった。一日当たりの平均面会回数は $38.3 \pm 3.6$ 回 (29回～43回) であり、毎日の面会回数の変動は予想以上に小さかった。12月の一日平均入院患者数は42.3名であった (表1)。面会者別では母親単独 (571/1072回 53.3%) が最も多かったが、両親での面会も36.9%と高頻度に見られ、特に夜

表1. 1997年12月(1ヶ月間)の面会状況

総面会回数	1072回
母親のみ	571回
父親のみ	62回
父母同伴	425回
その他	14回
-----	
一日平均面会回数	38.3 (29~43)回
1日平均入院患者数	42.3名

間及び休日には両親そろっての面会が多かった。父親単独での面会(62回, 5.8%)は少なかった。

### 1. 面会と時間帯

面会者の来室時間帯は日勤帯が662回(61.8%), 準夜帯370回(34.5%), 深夜帯39回(3.6%)と日勤及び準夜帯でほとんど面会は行われていた。この来室時刻を2時間毎に細かく分けて見てみた(図1)。図1では下段に従来の面会時間帯(7~8時, 14~16時, 18~19時)を示してある。この時間帯での面会も少なくはないが, 7割以上が従来の面会時間帯以外で来院している。

面会者数のピークは昼間は12~14時に, 夜間は従来の最終面会時間であった19時よりも遅い20~22時にみられた。午前中の面会は95回(8.9%)と非常に少なかった。

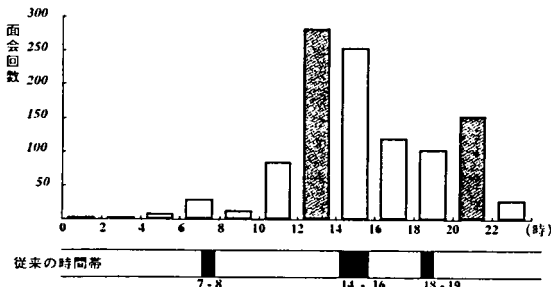


図1. 時間帯別の面会回数

### 2. 面会時の在室時間とその変動因子

面会者の面会一回当たりの在室時間は平均85.0±69.0分で全体の48.2%は1時間未満の面会であったが, 1~2時間の面会が26.0%, 2時間を越える面会も24.0%みられた(図2)。しかし,

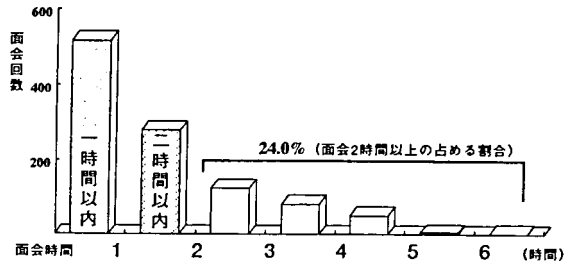


図2. 1回の面会における在室時間

父親のみでの面会では47回中僅かに2回だけ1時間を越える面会で, 父親単独での平均在室時間は29.6±16.7分とかなり短かった(Mann-Whitney 検定 P < 0.01)。

保温あるいは酸素投与のため, 保育器から児を出して直接抱くことができない場合の在室時間は42.5±25.4分であり, 直接抱くことが可能な場合の109.3±74.1分と比べ非常に短かった(Mann-Whitney 検定 P < 0.01)。

## V. 考察

私達の施設ではスムーズな業務遂行と感染防止(重症・緊急場面の多い新生児未熟児医療の現場では極めて重要)という視点と親子関係構築とのバランスの中で, 一日3回計4時間の面会時間を設定していた。面会時間を自由にするにより面会者(両親)の利便性は向上し, 最終目標である家族の中で生活ができるようにする親子関係構築には大きな力になる。

そこで, 1997年5月より面会時間を自由にすることを試みた。業務遂行の障壁, 四六時中両親がフロアの中に存在する事に対するスタッフの精神的負担等について危惧する声もあったが, “やってみなければ分からない”と医師と看護婦の合同会議で承認されスタートした。

面会者の動向が安定してきたと思われる約半年後に今回の調査を行った。入室・退室毎にノートに記載してもらうことと, 看護婦が毎日チェックをすることで記載漏れを防ぎデータの信頼性の向上を図った。

全面会回数は1,072回であった。24時間自由面会になって利便性から増加したとは考えられるが、比較調査を行っていないのではっきりとは言えない。

一日の平均面会回数は $38.3 \pm 3.6$ 回であり、標準偏差も小さく最も面会回数の多かった日でも43回と極端な集中は見られなかった。

時間帯については従来の面会時間帯と異なる時間帯に面会のピークが見られたことが、今回の調査の最も重視する点の一つである。今までの午後の面会時間帯（14～16時）よりも早い12時からの時間帯（職員の昼休みが集中する）と、従来の夜の時間帯（18～19時）よりも遅い20～22時の時間帯に面会者が多く、朝の面会は極めて少なかった。これは、仕事を持っている親の行動を考えれば昼休みの時間帯と20時以降になるのが当然と思われる。従来の18時から19時というのは仕事を終わってから（必ずしも終わっていないことも多いのでは？）駆けつけるにはあわただしすぎる時間帯であった。面会時間が自由になることは、家庭生活のタイムスケジュールの中で、無理をせず、患児と面会ができ、それによりストレスの中におかれた親子関係・夫婦関係が少しでも落ちつきを取り戻す事ができる一つの助けとなると思われる。

面会者の面会一回当たりの在室時間は平均 $85.0 \pm 69.0$ 分であったが、面会在室時間は我が子を直接胸に抱くことができるようになると大きくのびていて、平均でも2時間近くになっていた。実際、2時間を越える面会は全体の24.0%（257/1072回）に及んでいた。従来の1時間から長くても2時間の面会時間では、十分に両親の気持ちを満たしていない事もあることが分かり、このことも大きなニーズの発見であった。面会時間の自由化は時間帯のみではなく、時間の長さも自由になることが見落としていた点である。

また、人工呼吸療法中（即ちそれは入院の初期）「面会回数が少ない」とか「面会時間が短い」と、時折スタッフが両親に不安を抱いていることがあった。しかし、両親の面会の状況は医療が両親から育児行動を奪ってしまっていることと大きく関係

していた。我が子に触れること、抱くことができるようになる（即ち、通常の親子関係に近い状況）と面会は長く緊密になっていることがはっきり現れていた。このデータは両親の初期の戸惑いを焦らずに長い目で支えていこうというかたちでスタッフの意識改革になった。

業務への支障に対する当初の不安は、面会時間の自由化を実際に開始してみるとそれほど問題にはならなかった。ケアや治療・検査が集中する午前中は面会のニーズは予想以上に少なかったこと、日による面会者の変動も予想以上に少なかったことなどから医師、看護婦ともに対応に苦慮する事はほとんどなかった。

面会時間を自由にしてからの感染症の発生率については今回調査は行っていないが、当NICUの医師、婦長・主任ともに発生率に変化があったとは感じてはいない。面会が自由になったからこそ、風邪をひいている母親に“お父さんだけにしてください”と情に流されずしっかりと指導できることも感染対策上有利である。

## VI. おわりに

救急医療現場（新生児集中治療室）の高度医療・治療効果追求への努力・熱意を第一にしながらも、児の成長に欠かせない母子関係・家族関係構築のための看護的支援として、潜在化しているニーズを的確に把握し対応していくことが大切と考えた。

新生児・未熟児医療の発展により救命率が確実に向上している今日では、殆どのケースでいずれ家族の中で生活するようになる。そのためNICU看護のあらゆる場面で家族を中心とした看護の展開を考えて行くことを忘れてはならない。面会時間自由化もその一環として私達は意味のあるものとして踏み切った。当初の予想では気付かなかった大切なニーズがいくつかあったこと、業務への支障は僅かなものであったことから面会時間自由化はファミリーケアの向上に想像以上の好結果をもたらした。

## 謝辞

稿を終えるにあたり，本研究の統計学的分析法に助言を頂いた当院副院長，小久保荘太郎氏と本研究に協力を頂いた NICU 医師，看護婦に深謝いたします。

## 引用文献

- 1) George AL, et al : Postpartum (Neonatal) Sibling Visitation. Pediatrics 4 : 650, 1985.
- 2) 白井真美他：NICU における感染対策一面会，周産期医学，27：217-219，1997
- 3) 中嶋健之他：未熟児室（NICU を含む）への家族入室面会前後の年における細菌感染症発生動向の調査，小児臨，41：1825-1829，1988
- 4) 石関しのぶ他：NICU における面会者と院内感染，周産期医学，22：193-195，1992
- 5) Wilma BH : A Comparison of Infection Rates in a Newborn Intensive Care Unit Before and After Adoption of Open Visitation. Neonatal Network 11 : 15-18, 1992

JANN